

花菖蒲は何故咲くのか？

横浜市 松下 卓生

花菖蒲が花を咲かせる目的とは：

園芸植物として江戸時代より発展してきた花菖蒲にとつて毎年花を咲かせるのは当然の事であり、むしろ何らかの理由により花を咲かせない事の方が非常に不自然な状態になっていると考えるのが、理屈にかなっている様な気がする。栽培者から見れば、花の咲かない株を一年間丹精こめて愛培する程無駄な事は無く、来年花が咲くかどうか心配しながら栽培するのは精神的に非常に辛いと思うだろう。仮に、翌年必ず花が咲く条件があるとして、それを知りながら栽培すれば来年の開花を楽しみに待ちながら日々を送る事ができ、精神的にも非常に楽だと思う。逆に花菖蒲にとつても、ストレス無く毎年開花が出来るので非常に喜ばしい事だと思ふ(と想像する)。

以上の考えから、花菖蒲における開花生理について考察した。

葉の展開数から見た花菖蒲の開花

まず考えられたのが、ある葉数を展開した後に蕾を発生させるのではないかというシステムである。株が

成長して充実した後に花芽ができるのではないかと考えた。

これについて養賢堂発行「花卉の開花調節」によると、典型的な花菖蒲の苗条では22枚の葉を前々年と前年に展開し、翌年12枚の葉を展開した後に開花すると報告されている。ただし、これは典型的な例であつてもっと少ない葉数で開花することもあり、ハウス栽培など環境条件によつて変化するとしているので、葉の展開数と開花との間には確実な関係は無いと考えられる。

肥料の与え方から見た花菖蒲の開花

日本花菖蒲協会復刊2号 西田一声氏「花菖蒲の鉢栽培法」によると、9月末から11月上旬まで液肥による施肥を行うことが花芽構成に最も大切であるという。秋の成長期に株の充実をはかる目的と考えられる。ただし年間施肥量が最低どれくらい必要であるとか、NPK成分の最適な相対比率はどれ位であるといったことは見られず、培養土の種類や栽培方法といった環境条件等によって必要な施肥量は変わるのではないか

と思われ、肥料と開花との間には直接的な関係は無いと考えられる。

植物生理学から見た花菖蒲の開花

養賢堂発行「花卉の開花調節」ハナシヨウブの頁によると花菖蒲の開花に至るプロセスは次の通りとなる。

①「花芽創始」

一芽に一つしかない生長点が葉を分化する状態から花を分化する状態に転換する時期のことを言う。花芽創始が始まる条件としては、15℃以下の涼しい温度下で、およそ13時間半以下の短日状態が5〜30日間続くことである。

②「花芽形成」

花芽形成を進行させる状態のことで、二通りの経過がある。

A：①が完了した後、長日条件(夜温10℃で1日16時間日長)を与えると花芽の形成が進み、開花する。

B：①が完了した後、長日条件を与えないと、休眠状態に入る。

③「休眠打破」

上記Bの場合、休眠を打破することが必要で、日最低気温10℃以下の日が45日以上続くと休眠後花芽の形成に進む。

但し、以上の条件については品種間

により多少の差があるのではないかと考えられる。

結論

以上から考えると、秋までに株を充実させる事が前提ではあるが、秋に短日状態をしっかりと作つて花芽を確実に形成することが重要である。特に都市部においては、常夜灯や室内の明かり等の影響で短日環境が妨げられることが考えられるので、カーテンや仕切りを取付けて夜間に暗くなる様子を付けるのが大事である。また、温暖化の影響等で株の周辺温度が異常に上昇したまま短日条件を与えても花芽は形成されないの、場所によつては温度を強制的に下げた何らかの方法を行わなければならないことも必要である。

これらの点を理解して、最適な条件で栽培すれば翌年必ず開花すると考えられる。

ただし、この他に開花する条件があるかもしれないし、幾つかの条件が組合わさることで開花に至るのかもしれないので、今後さらに詳しい研究が必要である。

参考文献

1)1990(株)養賢堂「花卉の開花調

節.P113-119

2)1956(株)日本花菖蒲協会「花菖蒲

復刊2号.P18-24